# 別役物語



香美市物部町別役。江戸期には「別役村」として紙の原料や茶の生産などで栄えたと「披山（ほきやま）風土記」に記されている。
昭和30年代には300人ほどが暮らしていたが、仕事を求めて山を下りる人が増え、2023年では住民票登録者は3人となっていたが2024年誰もいなくなった。
瀬次郎、宇根、阿野地、津々呂の1955年（昭和30年）の戸数と人口を記した石碑が2022年2月に建立されている。
それによると別役には戸数51戸、人口278人が暮らしていたことが刻まれている。

すさまじい過疎化により、この地で営なまれてきた暮らしが消えていこうとしているが、この石碑により別役の地名と人々が生活していたことは後世に伝わっていくことだろう。

2024年別役は誰も住む人がいなくなった。
最後に残っていたのは小松富士賀さんのご両親と親せきの方だった。
ご両親は先祖といっしょにおりたいから別役に葬ってほしいと願い、別役へ深い深い愛着をもって故郷をずっと見守りながら静かに眠っている。

別役は鎌倉時代後期1309年（延慶2年）大忍庄定書に「別役」と記載された由緒ある村だった。（石碑より）

瀬次郎～石立山は石灰岩の山

富士賀さんのおじいさんは山道を歩いて回り足を越え、木頭まで博打に行っていたエピソードもある。

別役には営林署に勤める人も多かった。

土佐往還は槙山川右岸中腹を通り古代、土佐の国衙（地方役所）から物部川筋～別役～別府～回り足峠を経て阿波へ通じる道は、現在の車道より、かなり高い所を通っていた。
土居番、宇根番という番所跡や地名から別役は街道の中でも重要な役割を果たしていたと考えられている。

人口戦略会議が2024年に消滅の可能性があると見なした市町村は全国で744、高知県は25の自治体がその可能性があると表した。
消滅は人口減少が進み自治体運営が立ちゆかなくなる状態をさす。
県内人口はこの5年で9.92%減って65万人台。
社会減が拡大している。
これは自治体個別の問題ではなく日本全体の問題。

畑ではキビ、大豆、芋、こんにゃく、カジ、リンチョウなどを作っていた。

仕事を求め人が山から下りる時少しでも財産になるようにと家の庭先にまでスギを植えて故郷を離れていた。
今、別役を歩くと、家も田畑も深い山に飲み込まれようとしている。

平地の少ない山間部では人の住む家は日陰の斜面に建て日当たりの良い所に田畑を拓いている。人は自分よりも農作物を大事にしていたのだと感じる。

別役には往還が三本通っていた。

宇根には旅館もあった。

地蔵堂は極楽寺の跡。

田植えやカジはぎなどの時はみんなが楽しみにして集まりハッピやそうたを着て、はちまきをしめて力を合わせて作業をした。
このことを「結い」（いい）と呼んでいた。
カジを蒸す時はザルに芽を入れて蒸し、学校から帰るとおいしい芽を食べられるのが楽しみだった。

車道ができるまでは荷物は下の車道から背負って上げていた。

別役は傾斜地で田もなく畑でキビなどを作って隣近所で分け合って助け合いながら暮らしていたという。

別役小学校へは成山からも子どもが通っていた。山を下り、吊り橋を渡り学校までまた山を上る。
通学に何時間もかかった時代だ。
幼い1年生は親が背負って通っていた子もいたと考えられる。
険しい道で、事故で亡くなった子どももいたという。
山の子は偉い!! 並大抵ではない苦労を重ね、こつこつと山で生きてきた人たちは本物の地上の星だ。

富士賀さんが子どもの頃の冬は今よりずっと厳しく雪が深く、積もり学校へ通うのも大変だった。
わらぶきの屋根からは1mにもなるツララができて、弟たちはそれを刃や手裏剣がわりにして遊んだ。

## 別役唱歌

別役で100年以上前から歌われてきた。集落の地名を織り込み、人々の暮らしや歴史を伝えるこの歌は、大正6年頃に別役小学校に勤務していた林校長によって作詞、作曲された。
当時、小学4年生だった小原勝さんが書き残していた歌詞を保管していた娘の多喜子さんが歌うことができる唯一人の人。
この歌を後世に残したいと小松富士賀さんが2023年にCD化して次世代につなぐ。

## 「別役」

別役とは荘園の官吏名とか、正規の納税方法とは別に個別に別納することが認められた土地をさすといわれる。大和地方に大王政権が置かれていた時代、大忍庄の豪族、物部氏の荘園であったこと、その頃に別役村に荘園官吏が置かれたことを伝える地名と考えられる。
大忍庄の西川村にも別役という地名があり戦国時代、別役三郎秀重が本拠にしていた。（香美市広報より）

## 小松神社

宮ノ谷に鎮座する。御神体は平安時代の銅境。
平安時代の延長5年（927年）に編さんされた延喜式神名帳」土佐国の項に「香美郡四座」とある中の一社。
凶事や病気、災難の守り神として崇敬されている。
昔より六月一日の夏祭りには一夜づくりの麦こうじで神酒を作り、供え、十月三十日の秋の大祭には夜たいまつを焚いておごそかに祭典が行なわれた。
県内外の小松さんが参拝におとずれる。

祭日
1月3日 御門開き
11月 勤労感謝の日
7月 海の日

石段は373段ある

日本中を歩いた宮本常一は「国が豊かになるということは、隅々にまで豊かになるということでなければならない」と訴えた。
郷土のことをもっともっと深く知らねばならないと思う。

古代、日本に住み着いた秦の始皇帝の子孫「功満王（コマオウ）」のコマが転訛してコマツとなり、小松一族が祖先として祭ったと言われる。



NO.150
2024.6.21 夏至